

P. T. 130 の文中には Khri gtsang lde brtsan の名が示されてはいるが願文であり、史書類であるものではない。その点に P. T. 16 の場合とは異っている。

P. T. 131 には pho brang 'Od srung の名があるが P. T. 130 と同じく史書では入らなう。P. T. 132 には Khri gtsang lde brtsan の名が、P. T. 134 の I には Wu 'i dun bran 即ち glang dar ma の名が見えるが、その II と共に P. T. 130 と同じ願文である。例として glang dar ma が破仏の王でなかったことを示す史料ではなうが、分類は願文の項でのみあればよい。P. T. 175 と P. T. 130 に準ずるものがある。

P. T. 230 は Khri 'od srung brtsan の名が与えた単なる願文ではなく、王朝分裂後の統一を示唆する文句を含むので P. T. 16 と同じく扱われて当然である。

P. T. 849 は注で示されるように J. Hackin のテキストと訳があいでも、対訳語彙集と後部の間の II. 116-121 と末尾の I. 187 以後も含めて分けて示し、歴史の項に入れた方がよい。

P. T. 977 は注記はある (p. 24) が、いずれの項からも洩れていない。

India Office から求めて加えて貰った方がよいと思われるものが第二分冊に二点ある。一つは P. T. 1288 に加えて F.

W. Thomas が紹介した『繙手記』 Vol. 69, fol. 84 及び P. T. 1075 に加えて同じく Thomas が示した Ch. 88, VI とされるものがある。

以上、殊更くわたしたような批評と第二巻について希望を述べたが、第二巻の出版に間に合わないことかと気遣っている。

高価であるが、研究者の座右に置きたうものがある。

Mission Paul Pelliot, *Choir de documents tibétains conservés à la Bibliothèque Nationale complété par quelques manuscrits de l'India Office et du British Museum*, présentés par Ariane Macdonald et Yoshio Imaeda, Tome 1^{er}, publié avec le concours du Centre National de la Recherche Scientifique et du Centre d'Études tibétains du Collège de France, Paris Bibliothèque Nationale 1978.

サドヴァカソフ、ホジヤエヴア、イスノコフ編

ウイグル民族の歴史・文化に関する資料

護 雅 夫

本書はつぎの九論文を収録する。(一)カピロフ (Kahrov, M.N.)「祖国の科学における、ウイグル古代・中世史研究の問題によせて」(二)セメンノフ (Semenov, A.A.)「モンゴル諸国家におけるウイグルの文化的役割概要」(三)チホノフ (Tihonov, D.I.)「可汗国時代(七四四—八四〇年)におけるウイグル文化について」(四)イシエフ (Isiev, D.)「一九世紀後半(一八六四—一八六六年)におけるウイグルの民族解放蜂起の発端」(五)バラノヴァ (Baranova, Ju. G.)「一八七五—一八七八年における新疆での清朝支配の復活に関する、ウイグル年代記「Tarkhi-amiya」の報道」(六)イスマコフ (Ishakov, G. M.)「スウヤリェン (Sviridov, A.A.)」「テャルクメニアのウイグルにおける農業(一九世紀末—二〇世紀初頭)」(七)イスマイロヴァー・マードヴァ (Ismailova-Mamedova, E.)「ウイグルの絨緞」(八)カヂェ・ロン (Kadyrov, A.N.)「ウイグルの楽劇的演劇発達の諸段階」(九)ヘルシン (Erzin, M.)「ウイグルのソ連刊行物の初期の歩み」(カザーフ語)。

わたしは、当初、これらすべての内容を紹介するつもりで原稿を用意したが、与えられた紙数の関係から、ここでは、最初の三編だけにしか触れられなかった。「羊頭狗肉」の感なきにしもあらずであるが、これを諒とされた。

二

(一)では、主として帝政ロシア—ソ連におけるウイグル古代・中世史の研究史——文献的・考古学的——をたどつたのち、今後の課題——と筆者が考えるもの——が列挙されている。とくに、注のなかであげられている、ソ連時代にはいってからの研究文献目録——バルトルドにはじまる——は、きわめて簡単ながら有益である。しかし、本論文でしめされている筆者の見解には、ただちにしがいかねる点も少なくない。以下、そのうち、二、三だけをあげておく。

まず、ウイグル民族の起源の問題。たとえば、筆者はこうしるす。「ウイグル民族のはるかなる祖先のアルタイ(中略)、甘肅省、そのほか黄河上流域の土地への植民——当時、中国人の祖先はまだ黄河下流域に居住していた——の歴史、河西の多数のウイグル諸部族の、紀元を遠くさかのぼる時代における、牧畜・游牧生活形態への移行、紀元前八—四世紀におこつた、游牧ウイグルにおける原始共産制の解体と階級社会の発生、紀元前三世紀に、中国人侵略者によつて行なわれた、游牧ウイグル狄 (di)・狄歷 (dili) (Toquz-uyghur) の、河西からオルホン地域への駆逐、そして、古代ウイグルの古くからの土地——甘肅・オールドス——に沿う長城の建設の開始そのほか、悠遠の古 (Iubokij dreynost) の諸問題が、もつとも重要な意義をもつ」と。游牧ウイグル民族そのものの源流を、かような悠遠の古にまでさかのぼらせ、しかも、狄・狄歷を

Toquz-uyghur に比定するのは、あるいはグミリヨフ (Gumiriyov, I.N.) などの説に拠ったものか、とも思われるが、こうした事実を根拠づける証拠は何ひとつ存在せぬ。これに関連して、ウイグル民族は、この悠遠の古にユーロップ・オイド型人種であったにとどまらず、「今日においても、タジク・ウズベク両民族同様、ソ連領中央アジアの河間地域(ソグディアナ—護)の、いわゆるユーロップ・オイド型人種に属する」という断言にも、その論拠をしめしてほしいと思う。

つぎに、モンゴル高原における、筆者のいわゆる「遊牧ウイグル」と、東トルキスタンの、これまた筆者のいわゆる「定着ウイグル」との関係について。筆者は、オルホンの「テュルクールン文字」の発見・解説の結果、「On-uyghur, Toquz-uyghur——オルホンの遊牧民」と、東トルキスタンの定着ウイグルとが人種起源的に直接の関連を有していたことを証明する可能性^{「可能性」}が与えられたといひ、さらに、「モンゴル高原のウイグル遊牧民は、七世紀につくられたいわゆる『テュルクールン文字』または『オルホン文字』を使っていたが、これにたいして、東トルキスタンの定着ウイグルは、五世紀——あるいはそれ以前かもしれないぬ——に(マローフ [Malov, S.E.] 教授の推定するように)かれらの案出した固有の(ウイグル)文字を用いていた」とする。ここで、筆者のいわゆる「On-uyghur, Toquz-uyghur——オルホン

の遊牧民——」「モンゴル高原のウイグル遊牧民」と、突厥との関係を、筆者がどのように理解しているのかが明らかでないのみならず、さらに、「東トルキスタンの定着ウイグル」が「モンゴル高原の遊牧ウイグル」からきわめて古い時代に分離し、五世紀、あるいはそれ以前にいわゆるウイグル文字を使用していたという筆者の結論もまた根拠不足のそしりをまぬがれまい。

モンゴル高原におけるウイグル帝国の崩壊、ウイグルの主流の西方移動のはるか以前から、東トルキスタんに「定着ウイグル」——人種起源的にはモンゴルのウイグルと直接的関連をもつ——が居住していたという見解は、筆者のくりかえしのべるところである。たとえば、つぎのようにいう。「遊牧ウイグル(オルホン)と、定着ウイグル(東トルキスタン)との間の相関関係・相互連関の程度の究明、定着ウイグルにおける奴隸制生産関係の独自の特質の研究、そして、遊牧ウイグルにおける奴隸労働の利用、——これらも焦眉の問題である」と。また、かれが、「ウイグル民族は高い農業文化を有する民族である。地下水を地表にみちびくため、トゥルフアン—オアシスの住民は、すでに紀元前二世紀末にカーレーズを利用して」と書くとき、この「トゥルフアン—オアシスの住民」が筆者のいわゆる「ウイグル民族」をしめしていることはほほ明らかであろう。

このような考えにたつとき、一般にウイグルの主流のモンゴル高原から西方への移動とされている現象が、「遊牧ウイグル」と「定着ウイグル」との「合流・融合 (Sintese)」と見なされるのは当然である。たとえは、こう書かれる。「東トルキスタンのウイグルが、紀元はるか以前に、仏教に改宗しはじめたそのとき、オルホンのウイグルは、いまだ長期にわたって、シャーマニズム——祖霊信仰——の影響下にあった。ついで、後者は、マニ教に、最後に、河西、東トルキスタン、セミレチエの定着ウイグルとの合流・融合のち仏教に、そして、しばらくして、イスラム、さらに、キリスト教 (ネストリウス派) にさへ帰依した」、「研究上きわめて重要なのは (中略)、オルホン (モンゴル高原) の遊牧ウイグルと、東トルキスタンの定着ウイグルとの合流・融合 (九——〇世紀)、ウイグルによる、発達した封建的諸国家、すなわち、甘粛での甘州ウイグル国家、トウルファンでのウイグル・イディクト国家、そして、カシユガリアでのカラハン国家——それぞれ、二〇〇年、約五〇〇年、約四〇〇年にわたって存続した——の形成の問題である」、また、「(東方では) コムルから (西方では) フェルガーナに達する広大な単一領域において、二つのウイグル国家、すなわち、アルスラーンハンたちのウイグルスタン (天山ウイグル——護) とカラハン国家との土地において、遊牧ウイグルと定着ウイグルとの

合流・融合が進行した」と。こうした発言は、わが国で普通にいわれる「ウイグルの西方移動」よりはるか以前に、東トルキスタンの「定着ウイグル」が多数居住していたという見解にもとづき、いまのところ、わたしは、これには賛成できない。

さらに、筆者は、天山ウイグルのモンゴル帝国への服属、ウイグルのモンゴル西征軍への参加、モンゴル帝国内部でウイグルが果たした文化的・行政的役割について一言したのち、「ユーロップ・オイド型のウイグル民族のなかへ、多量のモンゴロイド型の混血が侵入した」といい、こうつづける。「そして、これとは逆に、八四〇年 (オルホン川流域における滅亡のち) に、多数の遊牧的 Toquz-uyghur, Toquz-oguz が東トルキスタンとセミレチエとへやむなく移住し、また、モンゴル支配の確立時代に、きわめて多数の東トルキスタンととりわけセミレチエのウイグルがソ連領中央アジア、さらに西方へ移住した結果、かれらと、それらの地域のテュルク語・非テュルク語住民との合流・融合が進行した。ウズベク、トウルクメン、アゼルバイジャンとウイグル・オグズとの間の言語的親近関係、人種的共通性は、この事実によつて説明される。類似の過程は、テュルク語諸民族のほかの集団内部でも進行していった。すなわち、全く同一の古代烏孫と中世キプチャクとの残党が、キルギズ、カザーフ、カラカルパク、

バシキールその他のテュルク語諸民族のなかへはいり、それらを構成したのである。(中略)、九—一三世紀における多数のテュルク語諸部族・民族の合流・融合、一四—一六世紀における新しいテュルク語諸民族の形成、——これはすべて、学問的にきわめて興味ぶかい」と。東トルキスタン、セミレチエ、そして、ソ連領中央アジア、さらにその西方の「テュルク化」が「学問的にきわめて興味ぶかい」ことはいうまでもないが、その過程は、上の一文で表現されるほど簡単でないこと、これまたいうまでもないであろう。

以上あげたほかにも、問題とすべき叙述が多く見られるが、ここではすべて省略せざるをえない。

三

(二)の冒頭には、編者の手になる、同論文の筆者セミノフ(一八七三—一九五八年)に関する簡単な紹介文が付けられている。それにすると、かれは、タジク社会主義共和国科学アカデミー会員、ウズベク社会主義共和国科学アカデミー準会員で、リトヴィンスキイ、アクラモフの言を借りると、「古い世代のすぐれたソヴェート東洋学者の一人」であり、本論文の草稿は、一九五一年、カザーフ社会主義共和国科学アカデミー「ウイグル・ドゥンガン(東干)文化部門」に提出されたものであるという。さきに紹介した(一)の筆者カビロフの

しるすところでは、同部門は一九四九年に創設されたが、のちに、「ウイグル学部門」と改称され、「これによって、ウイグル民族史の諸問題の組織的研究に着手することができにいたった」という。

この論文では、まず、モンゴル高原における帝国形成以前のウイグルと帝国時代のそれ(筆者によれば、Toquz-tyghu)、また、天山ウイグル王国、——これらの歴史を、中国史料、ジュワイニーの『世界征服者の歴史』そのほかによつて概観し、天山ウイグル王国内部での仏教・マニ教・ネストリウス派キリスト教の併存の模様、ウイグル文字の作成、都城の建設、壁画・ミニアテュールをはじめとする各種の芸術などに触れ、たとえば、マニ教経典に施されたミニアテュールについて述べたのち、「ウイグル文明は、この点でも、ムスリム・ミニアテュールがマニ教のそれに依存している事実を確証する可能性を芸術学者たちに与え、学問にたいしてきわめて重要な貢献をした」、また、フォンルコック、グリユンヴェーデル、スタインなどによるトゥルファン盆地での発掘結果に関してしてから、「ここ、この場で、これら造形芸術の傑作を創造した最初の名手が誰であったかの問題はしばらくおき、われわれは、この事業にもっともちかく、もっとも活発に参加したのは、豊かな才能に恵まれ、勤勉なウイグル民族であるという疑いなき事実注目せねばならぬ」といって、

ウイグルの、とくに文化的貢献を強調する。ついで、ジュウイニー、ラシード・ウッディーン、ルブルクその他の記述にもとづいて、モンゴル帝国内部におけるウイグル人の文化的——とくにウイグル文字の採用・使用に代表される——、行政的役割、そこでウイグルの信じた宗教——マニ教・仏教・キリスト教——、ウイグルとムスリムとの対立などについてのべ、モンゴルのムスリム地域への西征に関して、モンゴルが「これらの地域へ、ムスリムが嫌悪してやまぬ民族の、しかもそれらにまったく無縁の文字をもちこみ、自らの国家機関を、この民族の代表たち——ウイグル人——にゆだねた」ことをしるし、こうした事態は、ジョチウルス、チャガタイウルスにあつても見られたといひ、前者について、つぎの例をあげる。すなわち、一九三〇年、ヴォルガ川中・下流域、テレンフカ (Terenofka) 村近辺の、金帳汗国時代、一四世紀にぞくする一般平民の墳墓から白樺の皮に書かれたモンゴル・ウイグル語の写本が、墨壺・墨とともに発見された。これに関して、筆者は、「この発見は、一四世紀初頭、金帳汗国領域内で、たんに官庁事務のためだけでなく、一般の日常生活においても、モンゴル・ウイグル文字を自由に用ひ、モンゴル語にもウイグル語にも精通し、この両語を読みえた人々がいたことを証明する」といふのである。

ついで、筆者は、ムスリム地域におけるヤサとシャリーア

との対立に触れ、とくにミールホンド、ホンデミールの叙述によつて、チャガタイによるヤサの厳格な施行に注目する。

さらに、筆者は、金帳汗国のウズベク・ハン、イル・ハン国のガーザーン・ハンのイスラム改宗ののち、ウイグル自身も、「しだいにムスリム化していったが、自らの言語・文字を保持し」、これらは両方とも、「チンギス・ハンのヤサの力で根づいた伝統のために、金帳汗国、チャガタイウルス、これら双方のモンゴル人ハンたちの宮廷で、また、一四世紀のティムールの宮廷で、そして、一五世紀のティムール帝国時代に、それぞれの官庁での事務処理において、ペルシア語、部分的にはテュルク語と併存しつづけた」といつて、ウイグル文字が後世にいたるまで、金帳汗国（一四世紀末）、ティムール帝国（一五世紀中葉）、ムスリム・アジア地域（一六世紀）で用いられたことを示す例をあげる。そして、イブン・シーナーが姉妹とともにカシュガルに滞在したとか、かれがそのの妖術師・魔術師どもと戦つたとかという伝承、カシュガル・中国の王・王女や、インドのマハラージャ・隠者などに関する物語、そのほかこれらに類するものなかに、「ウイグル起源の何か、かれらがそのすぐれた文化領域から中央アジア (Srednaja Azia) へ自らもちこんだものに由来する何かが存在せぬであらうか」、また、「はるか遠隔の、トゥルフアン盆地の諸都市の廢墟で、考古学者たちが、西方地域の物

質文化の多くの諸問題を説明し、ときにはそれらを解明するに足る顯著な事実を少なからず発見しているとすれば、中央アジアの精神文化のなかにも、ウイグル起源の要素が少なからず残存したのではなからうか」と問うて、本論文をむすんでいる。

こまかい点については疑問の箇所がないでもないが、大局的には、ほぼ首肯に値するといつてよからう。

四

(三)では、まず、カラバルガスンそのほかの都城址・カラバルガスン碑文の発見・発掘・研究史を略述して、ウイグル帝国における都市の成立、その規模・構造などについてのべたのち、発掘の結果から、都市の周辺では農業が行なわれ、手工業が分化して都市に集中し、また、その都市には比較的広汎な販売市場の存在したことを推定し、こうした諸都市の成長、住民の或る部分の定着化、手工業・商業の発達、近隣諸民族との間の不断の関係、——これらが「人々の風俗・習慣・心理に影響を与えた」といい、ほぼつぎのように説く。「諸都市では、経済的・文化的・イデオロギー的に、すべて新しいものが生まれ、遊牧に従事する住民は、主として、都市とかわりあうかぎりにおいて、それに触れた。したがって、当然のことながら、遊牧の行なわれた地方では、定着民・都

市住民におけるよりも、古い伝統がより、強固に保存された。表面的に見るならば、経済・文化・生活における諸変化は、まだ大したものではなかったといえる。しかし、重要なのは、そうした変化が生まれて発展したという点、ウイグルの動きの過程が、古い社会的存在形態ではなく、時としてまだ弱々しいとはいえ、新しいそれにむかっていたという点にあった」と。ウイグル帝国時代に、モンゴル高原の社会に或る種の発展が見られたことは、わたしがかねがね主張してきたところであり、この意味で、わたしは、上の主張に、その大筋において左祖したいと思う。

ついで、トゥーヴァ地方(トゥヴィンスカヤ自治ソヴェエト社会主義共和国)におけるテレールホル(Terehol)湖中の島上の都城址とシャゴナルスコエ都城址に触れて、これらをウイグルのトゥーヴァ地方支配時代のものとする見解に賛意を表し、とくにシャゴナルスコエ第三都城址は、ウイグル帝国の第二代可汗、磨延慶(葛勒可汗〔在位七四七—七五九年〕)がトゥーヴァに遠征したさいの本営の遺址であろうとするキズィラソフ(Kyzylasov, I.R.)の推定は、「根拠のないものではない」という。しかしこの推定には反論もあり、わたしは、いまのところ、この意見には疑いをもっている。

これにつづいて、筆者は、ウイグルの都市・城塞の方形プランの源流について、それは、一方では、匈奴の堡壘にさか

のぼりうるが、他方では、それは、セミレチエ、ソグディアナ地方の都市・城塞にも求めらるという。

筆者は、このあと、ウイグルの陶器の形態・製作方法・文様と、ハカス（ハカスカヤ自治州）、ミヌシンスク地方の陶器のそれらとの間の類似を指摘し、これは偶然の一致ではなく、それ以前に北モンゴル高原の一地域で作成されていた壺形容器が、「そのうち、ウイグル可汗国が内陸アジア（Central Asia）で支配的地位を獲得したとき、ウイグル、ハカス双方の壺形容器のプロトタイプになったのであろう」と推定して、このように、「ウイグル、ハカス双方の陶器に影響を与ええた土器製造の中心が北モンゴル高原に存在した事実を認めることは、きわめて重要な意義をもつ」という何となれば、筆者によれば、こう考えたと、「ウイグルの陶器製造は、その地方に固有の伝統と関係づけるべきであって、その源流を、中国の陶器製造の影響に求めるべきではない」ということになるからである。

つぎに、ウイグルの弓に触れ、その先蹤は匈奴のそれにあるが、ウイグルの弓には匈奴のものには見られぬ付属具があり、同様な弓がベンジケントから発見されていることをのべて、「ソグド人とウイグルとの間に、商業的・文化的に不断の関係があったことを考慮するならば、ウイグルの弓がベンジケントで見つかっているのは、きわめて当然である」とい

い、また、ウイグルの墳墓出土の容器・鏃も、内陸アジアのものより、ソ連領中央アジアのそれに似ていることを指摘する。

ついで、ウイグルの石人について、それは「敵軍との戦闘において名声をあげた英雄たち」をあらわすという見解を支持し、シャーマニズムの埋葬様式が、マニ教の流入後もひきつづいて存在していたことをのべたのち、ウイグルの牟羽可汗によるマニ教採用の意義に関して、こうしるす。「ウイグル可汗国が成立し、中央権力が可汗として形成され、ウイグル諸部族は、民族、つまり、統一的な政治的関心が存在し、よりよく組織された人種的共同体となった。民族的諸伝統とむすびついたシャーマニズムは、これら新しいイデーを表現しうるものではなかった。可汗国の中央権力は統一的な宗教を要求していたのである」と。

さらに、ウイグル文化の一般的性格については以下のようにつく。それは、可汗国の形成期に、突如出現したものでなく、その起源は、高車にはじまるウイグルの氏族・部族的諸連合の文化にある。しかし、他方では、ウイグルへ、とくに中国とソグディアナをはじめとするその西方地域とから新しい文化要素が移入され、それらによって、ウイグル文化は豊かになった。ウイグルは、中国から、生活に用いられる絹と陶器とを移入したが、中国のイデオロギー的諸観点・言語・

文字は吸収しなかった。唐の公主の降嫁も、ウイグル文化にはいささかの影響も与えず、また、「反乱鎮圧期に中国各地へ赴いたウイグルたちは、依然として、自らの祖先の風俗・習慣にしたがっていた」。

これにたいして、ソグド人そのほか、ウイグルの西方諸族との関係はまったく違っていた。ウイグルは、これらから、「都市建設の試み、宗教的信仰、文字」など、かれらの経済的・文化的発展の要求にこたえうるものを取り入れ、これらは、「ウイグル社会の生活全面に影響を与え、社会生活・生産・イデオロギーの諸観点における変化をおよぼすことになった」のである。この結果、ウイグルは、経済的・文化的、文化史的にみてひとつの領域にふくまれるにいたったが、「そのなかで、長期にわたるさまざまな交渉、相互的影響関係のために、相似た人種的特質——物質文化と精神文化の若干の現象にもっともはっきりあらわれる——が成立したのである。この領域は、定着的農民と遊牧、牧畜民とが住んでいた内陸アジアとソ連中央アジアとのかなり広大な地域をふくみ、「ウイグルをこの複合体コンプレックスから引きはなすのは自然でなく、同民族の真実の歴史を歪曲するものである。ウイグルのこれにつづく全歴史は、同じくまた、すでに古代において内陸アジアで形成された経済的・文化的パターンと結びついている」。

筆者は、大略このようにしるしたのち、「八四〇年におこ

った、キルギズによるウイグル可汗国の打倒は、ウイグル文化の発展によからぬ影響を与えた。しかし、ウイグルの東トルキスタンへの移住ののち、高昌（トウルフアナーオアシス）を中心とする国家の建設は、ウイグルの文化的発展の新段階であった」という文章で、この論文を終えている。

要するに、筆者は、ここで、ウイグルの社会に、それまでは見られなかった新しさが生まれたことを指摘し、そのウイグル文化の源流を、モンゴル高原における、遠くは匈奴、近くは高車からの文化的伝統に求めるとともに、ウイグル文化が、中国の、ではなく、むしろ、ソグディアナを主とするその西方地域の文化要素の移入によって豊かになり、結局、ウイグルが、内陸アジア・ソ連領中央アジアをふくむ、ひとつの、いわば「文化圏」に組みこまれ、その不可分の構成メンバーになったことを説いているといえる。これは、新疆維吾爾自治区をめぐる中ソ関係を意識した発言と、とってとれないが、また、モンゴル高原のウイグル帝国時代の文化と中国文化との関係について考察がゆきとどいていない憾みはあるが、ウイグル社会における新しさの誕生、ウイグル文化にたいする西方——とりわけソグディアナ——文化の影響をあらためて重視した点で、一応、傾聴に値するであろう。

本書におさめられた他の六論文については、べつの機会に

紹介したいと思う。

G.S. Sadrasov, R.D. Hodževa, G.M. Ishakov (red.),
Materialy po istorii i kulture ujgurskogo naroda, Alma-
Ata, 1978, 218 s.

サドヴァカソフ、ホジャエヴァ、イスハコフ編『ウイグル
民族の歴史・文化に関する資料』

ロミラリターパル著

古代インド社会史——若干の解釈——

山崎 元 一

著者ロミラリターパル女史は、ペンジャープ大学を卒業後、
ロンドン大学オリエントリアフリカ学部で学び、一九五八年
に『アシヨカとマウリヤ帝国の衰亡』（一九六一年出版、拙
評『史学雑誌』七二卷一一号、八三—九〇頁参照）で博士号
を取得した。その後ロンドン大学、デリー大学で教鞭をとり、
現在はニューデリーのジャワーハルラーリネル大学、イン
ド古代史担当教授として活躍中である。彼女の著書のうち、
『インド史』（ベリカン叢書、一九六六年）が邦訳されてい
る（みすず書房、一九七〇・七二年、辛島・小西・山崎訳）。
ここに取り上げた『古代インド社会史』は、著者が一九六六

年から一九七八年までの一三年間に発表した論文および講演
原稿計一四篇を収載したものであり、この期間における著者
の関心の所在と、研究の進展とを知ることができる。以下に
一四篇の題名とその内容の概略を紹介する（原書には章番号
は付されていないが、便宜上番号を付しておく）。

第一章「インド古代史の解釈」

本書のイントロダクションの意味をもつ章であり、研究史
がおよそ次の順序で概観されている。——一八世紀末におけ
るヨーロッパ人インド学者の誕生と彼らの後継者によるイン
ド古典研究、とくに一九世紀半ばより盛んになったアーリヤ
民族至上主義的な研究の進展。J・ミルの『英領インド史』
（一八一七年）にはじまり、一九世紀後半に確立する停滞社
会論、東洋的専制君主論、村落共同体論、アジアの生産様式
論などの一連のインド社会論の展開。V・スマイスに代表され
る行政官史家によるヨーロッパ的偏見に満ちた政治史研究。
古代インドの政治・文化の栄光を力説した民族主義者の歴史
研究。インド内の社会悪・政治悪をムスリムの侵略・支配の
結果とみるコミュニズムの歴史研究。民族運動期にはじま
り独立後さかんになった社会構成や政治経済制度の組織的研
究。——また、論述の過程で、民族主義的インド史研究が地
方史研究を促したこと、インド人によるインド史研究の高ま